

創造の意気ここにあり

令和3年5月31日

学校長 遠藤まり

学校ホームページ <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/jhs/sugeta/>

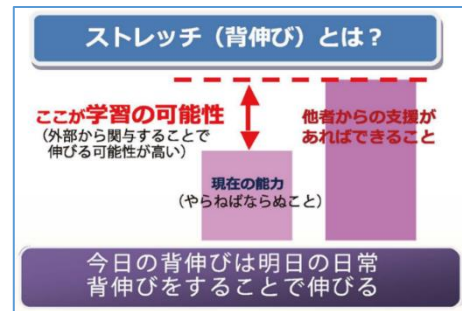
「今日の背伸びは明日の日常」

～「背伸びの経験」と「内省」が人を育てる～



副校長 三藤 敏樹

令和3年度が始まって2ヶ月が経ちました。菅中生が入学・進級して2か月、今年度は新型コロナウイルス感染症への対応に加えて、GIGAスクール構想によるタブレット端末（Chromebook）が1人1台用意され、生徒は各教科の学習や生徒総会の準備など学校生活のさまざまな場面でICTを活用するなど、新しい学びのあり方が展開されています。菅中生は其中でいくつもの「背伸びの経験」をしている様子が見えます。（学校ホームページでもご紹介していますので、ぜひご覧ください。）



「背伸びの経験」とは、私が4年前勤務していた横浜市教育委員会事務局教職員育成課が、東京大学准教授（当時。現在は立教大学教授）の中原 淳先生とともに、学校の先生のキャリア形成について研究を行った際に見出されたキーワードで、「内省」（振り返り）という言葉とセットになっています。

すでにできるようになっていることを繰り返すだけでは、十分に成長することはできません。「自転車の練習」や「鉄棒の逆上がりの練習」のように、現在の能力では自分一人ではできないことでも、保護者、先生、友達などの他者からの適切な支援（サポート）があることによってできるようになります。学校生活の中でも、教科の学習、行事に向けての準備、部活動などの中で、生徒にとっての「困難な状況」がありますが、他者からの適切な支援があることによって、その「困難な状況」は「背伸びの経験」をする絶好の機会となります。

そのときに大切なのが「内省」（振り返り）です。「困難な状況」に向かって「背伸びの経験」をしているときには、「じっくり考え、状況を振り返り、「持論化」し、また、『困難な状況』に向かう」というサイクルを繰り返すことが成長につながります。ここで重要なことは、「持論化」する、すなわち、「自分の状況や判断、気持ちなどをしっかり言葉で表現する」ということです。そのためには、「内省」（振り返り）をする機会を意図的に作る必要があります。中学生の生活で言えば、テストや試合の後、行事の後など、あるいは困難な状況や課題が生まれたときなどに、「自分の状況や判断、気持ちなどをしっかり言葉で表現する」機会を作ることが有効です。「背伸びの経験」と「内省」（振り返り）を繰り返すことによって、やがて「他者からの適切な支援」がなくても、自分自身の力で「困難な状況」を克服できるようになっていきます。

中学校の技術の教科書では「PDCAサイクル」について学びます。何かに取り組むときにPLAN（計画）、DO（実行）、CHECK（評価）、ACTION（改善）の流れを繰り返すことで、よりよいものづくりや問題解決ができるという考え方です。テストや行事に向かって計画を立て、時には「背伸びの経験」をしながらそれを実行し、「内省」（振り返り）の機会を作って自分自身の取組を評価し、次へのアクションプラン（行動計画）を立てる。これを繰り返すことが、たとえ「困難な状況」にぶつかったとしても、それを解決するために意欲的に向き合う姿勢につながり、自分自身を成長させる働きに変わると考えられます。

菅中生としての日々の生活の中で、いつの間にか「自分は成長したな」と感じる場面、それは、PDCAサイクルの中で、まさに「今日の背伸びは明日の日常」になった場面であると思います。そういう場面を数多く作るよう、菅田中学校は取り組んでいきます。

中学生が「背伸びの経験」と「内省」（振り返り）をする場面には、多くの人々の支えがあります。今の生徒にとっての「日常」がまだ「背伸びの経験」だった時（それは学校の勉強に限りません）、家族や地域の方々のサポートがたくさんあったと思います。菅田中学校は、保護者や地域の方々など多くの人々に支えられています。菅中生は、家庭で過ごすとき、地域で施設や公園等を利用するとき等に、それらの使い方を考え、周りの人々への感謝を忘れず、そして、「自分のその一員として何ができるか」を常に意識して取り組んでほしいと考えています。